

## 【看護部の理念】

私たちは病院理念に基づき、市民の皆様に信頼される質の高い看護を提供します。

## 【基本方針】

- ・ 人権を尊重し、安全・安心な看護を実践します。
- ・ 地域との連携を深め、継続的な看護を提供します。
- ・ 知識・技術・感性を磨き、自律した専門職を育成します。

## 【令和5年度目標】

- ・ 患者・家族の思いに寄り添った看護を提供する。
- ・ ホスピタリティマインド（もてなしの心）を高め組織を活性化する。
- ・ ヘルシーワークプレイス（健康で安全な職場）を推進し専門職として成長する。

## 1 看護部として

令和5年度、看護部は「互いにやさしく、互いを大切に」の精神で、丁寧に患者・家族のみなさんを看護すること、職員同士も丁寧に関わり合うこと、そして自分自身も大切にすることを心がけ、病院職員の一員として看護を提供してきました。

看護部の関わった主な取組みとして、ICUの開設においては、胎児から高齢者により高度な医療を提供するため、看護職員の手厚い配置、教育やチームの醸成を図りました。また、脳神経外科の拡充に伴い、速やかに治療・処置が開始できるよう「コードA」による緊急対応体制を構築し、対応力をブラッシュアップしてきました。さらには入院を断らないために、主科にとらわれないベッドコントロールをし、マンパワー不足を回避するために職種を限定せず、自部署以外ヘリリーフを出すことで質保証に努めました。

看護の面では、退院後も不安を最小限にし、必要なケアを地域でも継続できるよう、成人・小児に関わらず、地域との連携、退院前後訪問や同行訪問等の患者支援を推進しました。がん看護外来においても、より多くの相談を受けられるよう、専門性の高い認定看護師を相談支援センターに配置しました。また、地域保健の活動としては、疾病予防や母子保健等の出前講座を行い、地域住民との交流の機会も設けました。

看護職員がやりがいを持ち、心身共に健康に働き続けるためには、専門職としての本来の業務に費やす時間が十分確保され、時間外業務が縮減でき、自分の生活が充実することが重要だと考えます。これは患者満足度の向上にも影響します。よって、マンパワー不足の解消と専門性の高い看護提供を目的に、薬剤部とのタスクシフトの推進、介護福祉士の日勤・夜間の増員をしました。また、新病院も視野に入れた看護職員の確保のため、就職説明会への参加、病院見学実施、看護協会主催のふれあい看護体験に参画しました。

甚大な被害のあった能登半島地震に、DMAT 隊員看護師と看護協会登録の災害支援ナースを派遣させていただきました。

令和8年秋頃の移転開院準備は既に始まっています。この先も、進歩する医療と共に質の高い看護を受けていただけるよう、千葉市の病院として努力していきます。

## 業務担当

副看護部長 町田 裕子

令和5年度は、当初から新電子カルテシステムの導入や病院機能評価の受審等、看護職員の業務に大きな影響を与えるイベントがありました。新電子カルテシステムの導入では、旧システムとの違いに戸惑うことも多くありましたが、操作手順をマニュアル化し共有する等様々な工夫をして乗り切ることができました。また、機能評価では、千葉市立海浜病院の医療を第三者に評価してもらう機会となり、自分たちが慣習的に行っている看護に気づき、改めて見直す機会となり、質改善につなげることができました。

さらには、特定集中治療管理料の新規取得やGCU病棟の受け入れ再開では、関係者と連携をとりながら体制の整備をすすめ、重症患者やその時期から脱した患者が、回復に向けてケアを受けられる体制が整いました。また、院内で活動する様々なチームがその役割を果たし、患者・家族の思いに寄り添った看護の実現に向けて、関係職種と連携を取りながら活動できるよう、カンファレンスやラウンド、研修開催等を支援しました。

次年度以降も、千葉市立海浜病院に通院・入院する患者、支える家族が安心していただけるよう、看護職員だけではなく多職種と協働しながら、病院機能の向上を目指していきたいと思えます。

## 労務・総務担当

副看護部長 田口 理英

今年度も看護部目標の1つとして「ヘルシーワークプレイスを推進し専門職として成長する」を上げ、困難な状況の中でも看護職員が健康で安全に働き続けられる職場づくりに取り組みました。多くの看護職員が夜勤・交代勤務に従事しており、各部署で根拠に基づいた勤務計画を実践しました。そのために必要な人員が確保できるようタイムリーな採用計画と募集に取り組みました。夏休消化は100%取得でき、年休の消化は部署間の差はありますが前年度より向上しました。

看護部には、常勤だけでなく様々な雇用形態の職員が働いています。4月には50人の新採用者を迎え、「互いにやさしく、互いを大切に」というスローガンを看護部の職員一人ひとりが意識し行動することでホスピタリティマインドも浸透しつつあります。千葉市から看護職員派遣要請を受け、ゆうあいピックや重症心身障害児の宿泊研修にも参加しました。また、元日を襲った能登半島地震に災害支援ナースやDMATメンバーとして災害対応をすることができました。

次年度以降も、千葉市立海浜病院の職員として患者・家族の思いに寄り添った看護を提供するために健康で働き続けられる職場環境作りに継続して取り組んでいきたいと思えます。

## 教育担当

副看護部長 竹田 貴子

看護職は、人々の生涯にわたり健康な生活の実現に貢献することを使命としています。2023年6月に日本看護協会より示された生涯学習ガイドラインにおいても、生涯学習の目的を「人々の健康に寄与すること」と明記されています。

そこで、これからの時代の看護職には時代の変化に即して様々な能力が求められ、主体的に「学び」を継続していく必要があることから、「千葉市立病院 キャリア開発ガイド」を作成しました。作成にあたっては、看護実践能力を向上するために必要な学習課題とその内容を整理し、看護職が生涯学習を主体的に計画できるよう工夫しました。具体的には、「学習マトリクス」や「看護実践能力の実践例」を示し、その学習で得られる学びはどのような能力とつながっているのかわかりやすくしました。生涯学習を具体的に進めていく際の学びの羅針盤として本ガイドの活用が望まれます。

## 人材確保担当

副看護部長 町田 裕子 田口 理英

新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行したことを踏まえ、千葉市立病院で働きたいと考えて

いる方々が参加しやすい実施形式を考え、説明会を開催しました。具体的には、オンライン形式、対面形式ともに開催し、職場イメージを感じるという部分では、認定看護師による研修やスタッフエリアも含めた病院見学等、その内容も工夫しました。さらに、千葉県看護協会が主催する「ふれあい看護体験」にも施設として参加し、10名ほどの高校生を迎え、看護体験をしていただきました。今年度の人材確保活動では、現場で日々看護を実践している多くの看護職員の協力のもと、複数のイベントを開催することができ、千葉市立海浜病院という職場知っていただく機会となりました。

次年度以降も、千葉市立病院として「患者・家族の思いに寄り添った看護」を実現するため、千葉市立病院を知っていただく活動を継続していきたいと思っております。

## 2 各部署の目標と評価

病棟目標は部署の特徴にあわせて立案され、スタッフの個人目標に繋がり、概ね達成できました。看護力の強化に繋がったと評価しています。

部署	重点目標と評価
7階病棟	<p>「母子とその家族が求めるニーズを把握し、ニーズに応じた看護を提供する」・「ヘルシーワークプレイスを推進し互いの成長を支え合う組織運営を行う」の2点を目標とし、取り組んだ。患者中心の看護をチームで提供できるために、カンファレンスの充実を図り、毎日テーマを決めてカンファレンスを行った。また、ハイリスク妊産婦の支援を充実させるために地域との連携し連絡ツールの見直しを行うことで、妊産婦の継続支援が速やかになったと評価できる。</p> <p>コロナ禍で中断されていた立ち会い分娩を再開し、安心や満足できる分娩環境を提供することができた。また安全な療養環境のために緊急帝王切開のシミュレーションや、災害訓練を開催し患者・スタッフにとって安全な病棟作りに取り組むことができた。</p>
6階病棟	<p>「患者を敬い、その人らしい生活を送れるための援助を行う」・「互いを敬い、一人一人が自分らしさを発揮する」の2点を重点的に取り組んだ。患者の療養生活の環境を整え、安全を確保するために、感染防止対策・KYTを意識した環境整備を行った。また入院時のオリエンテーションの見直しで業務整理ができ、看護の質の向上につながった。そして、スタッフ各自が職場で尊重されていると感じられるよう、日々の業務のなかでよかったことのフィードバックを行った。その結果、スタッフ一人一人がこの病棟に自分が必要であるという思いを持つこと、そしてそれぞれが役割を遂行するために協力し合うことが、認め合える組織作りの継続のために必要だったことがわかり、成果をあげるための土台を創造できたと評価する。</p>
5階病棟	<p>「根拠に基づいた安全な看護の提供、多職種と協働し患者・家族のニーズを捉えたシームレスな看護の提供、お互いを大切にして組織の協力体制の強化」に取り組んだ。脳神経外科の診療が拡大し、各部署との協働しながらクリニカルパスや看護手順を作成し、安全な看護の提供に取り組んだ。また、多職種で身体抑制カンファレンスを行うことで、患者の状態に合わせた身体拘束を実施できるようになった。</p> <p>多職種での退院支援・倫理カンファレンスや地域の医療者との退院前カンファレンスを開催し、患者・家族の思いに添ったシームレスな看護を提供することができたと評価する。お互いを大切に出来る職場環境を目指し、スタッフの関係の質向上に努め、メンバーシップについて内省を促した。その結果、各自が自己の役割を意識する機会となり、臨床看護実践能力評価表「チームワーク力」の各自の自己評価の向上につながった。</p>
4階病棟	<p>目標を「1 倫理的感性を持ち、患者・家族のニーズに対応した看護を提供する」とし、多様な患者や家族に対応するために、アセスメント力の向上に取り組んだ。呼吸状態の観察やMET シミュレーションなど、急変時に備えるための力を身につけることができた。今後も多様な病態を持つ患者を看護する上で必要な学習会の機会を継続的に計画していく必要がある。「2 多職種が働きやすく、やりがい感を持って働くことができる。」とし退院支援に関して多職種で検討し、支援する仕組みを定着させた。今後は、高齢、独居など社会的に支援が必要な患者や繰り返し入院する患者に対して、在宅で継続して看護を提供できるようにスタッフ自身が考え、退院後同行訪問などの取り組みを継続し体制を整えていきたい。</p>
3階病棟	<p>目標を「お互いを支え合い、チームとして安心・安全な看護を提供する」とした。スタッフの小児科経験年数3年以下が半数以上を占める中で、病棟の現状と病棟目標を説明し、期待する役割、後輩育成の必要性を伝えてきた。また、スタッフは自分の役割を理解し互いを大事にしたコミュニケーションに取り組むことができた。その結果、スタッフ</p>

	<p>全員が支援を求めやすい関係性の構築につながり、お互いを支え合い成長する事ができた。更に、医療安全ではインシデントに対しみんなで考える、話す機会を多く持ちリスクアセスメント力の向上と再発予防に取り組みアクシデントを発生させることなく経過できた。働きやすい職場を目指しお互いを大切に、聞きやすい関係はチームとして安心安全な看護の提供につながったと評価する。</p>
<p>新生児科 病棟</p>	<p>今年度、「互いを認め合い優れたコミュニケーションをとることで、安全で安心な看護を提供する」を重点目標にあげた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新人教育や重症患者を受け持つ際の、ペアで看護する体制（KPS）は定着し、勤務終了時にリフレクションを行い、心理的安全性やコミュニケーションが増えることにより安全や医療の提供につながることができた。</li> <li>・シミュレーション訓練を行うことにより、良質で安全な医療提供する意識を高めることに繋げることができたと考える。</li> <li>・面会時間の緩和を行ったがアウトブレイクを起こすこともなかった。カンガルーケアの再開に向けシミュレーションをおこない安全な実施がおこなえた。このことによりカンガルーケアを希望する家族が増加し、親子の相合交流を促す療養環境の整備を提供する事ができたと考える。</li> <li>・互いにやさしく、互いを大切にできる職場作りにおいて、次年度もスタッフの KPS とリフレクションを継続し職場環境を整えていく。</li> </ul>
<p>ICU 病棟</p>	<p>10月の病棟編成に伴い、新人や他部署からの異動者に対する教育体制を見直し、「クリティカルケア看護の基本を踏まえて、安心な療養環境を提供する」を目標に取り組んできた。診療科拡大に伴う患者数増加や重症度が高くなっている中、他施設の医師に参加していただき開催した多職種カンファレンスや、在籍患者すべての ICU 回診の実施により、多職種とのコミュニケーションや連携がスムーズになり、患者への安心・安全な看護の提供に繋がったと評価する。</p>
<p>手術室</p>	<p>重点目標を「周術期にある患者と家族に寄り添い、安心安全な看護を提供する」とした。看護師が周術期チームの一員として、専門性の発揮などの役割を果たすとともに周術期の患者と家族を理解し、看護ケアを実践するための取り組みを行った。このうち、定期的なミニカンファレンスでは、相互理解を深め看護観を共有することができ、安心安全な看護につながることができたと評価する。</p>
<p>外来</p>	<p>重点目標を「ホスピタリティマインドを育み患者・家族に寄り添う看護を提供する」とし、スタッフ同士が互いに接遇を意識し働きやすい職場を目指すために、毎月スローガンを掲げ朝礼で唱和した。そして、サービスサイクルやコミュニケーションスキルの勉強会を開催した。これらの活動を通し、ホスピタリティマインド向上への意識付けに繋がったと評価する。</p>
<p>相談支援 センター</p>	<p>「相談業務・入院支援を充実し、患者及び家族に安全・安心な質の高い看護を提供する」をスローガンに、主に各部門との連携による患者の個別性に合わせた入退院支援の実践、PFM 運用に向けたシステム構築、多職種協働による働きやすい職場環境作りに取り組んだ。各スタッフの担当病棟を決定し、病棟カンファレンスへ参加することにより、入院支援を行った患者についてスタッフが主体的に部署内で情報共有するようになり、介入が必要な患者について、早期から病棟及び関連部署との連携し患者支援に繋げる事が出来たと評価する。また、業務改善として大腸内視鏡検査説明の視聴覚資材作成・導入を行った。患者・他部門からの意見を参考に、ブラッシュアップしていくことが課題である。</p>

### 3 看護部職員配置状況

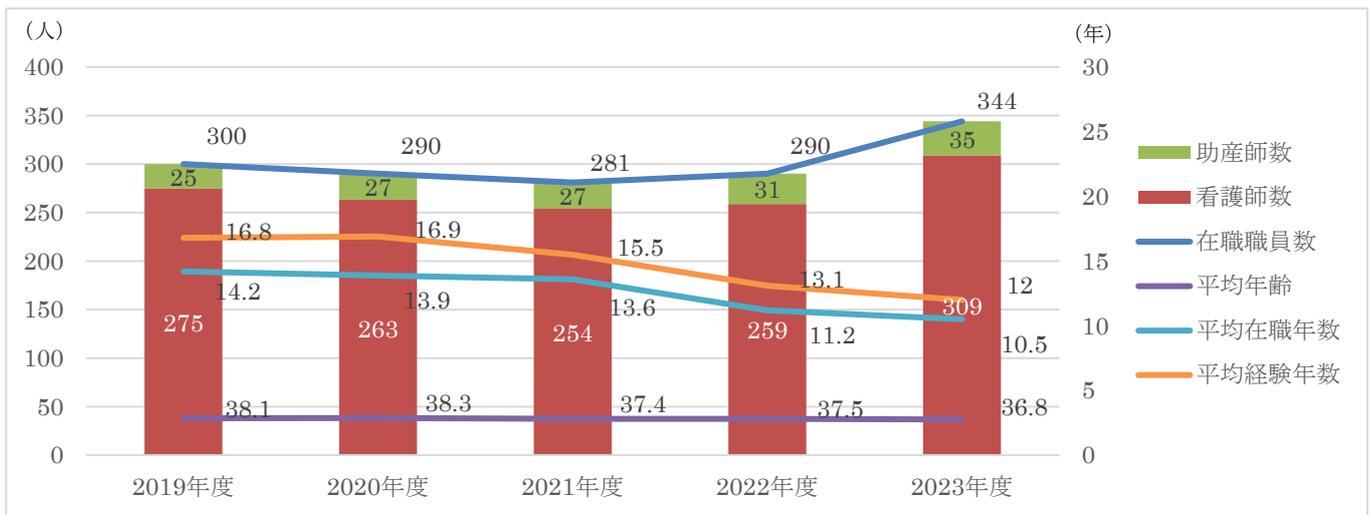
- ① 看護単位：9 単位
- ② 常勤看護要員：看護師 294 名 助産師 35 名 介護福祉士 3 名 看護補助員 4 名  
 会計年度任用職員看護要員：看護師 12 名 助産師 2 名 介護福祉士 5 名  
 看護補助員 1 名 看護クラーク 7 名

③ 部署配置

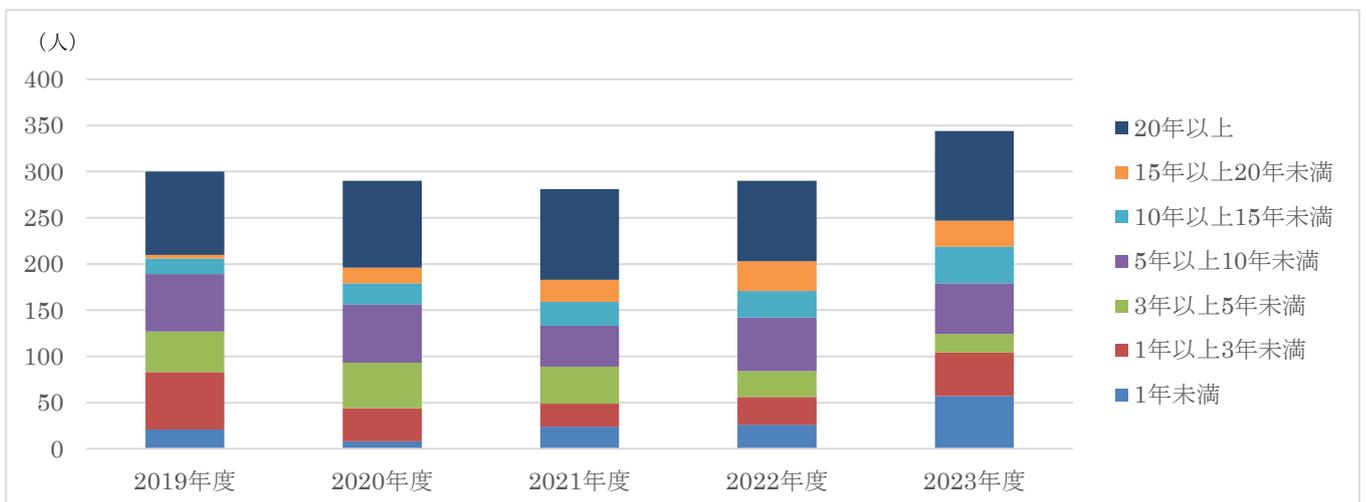
看護単位	病床数	看護配置
7 F 病棟	44 床 (MFICU 3 床)	7 対 1 (MFICU : 3 対 1)
6 F 病棟	53 床	7 対 1
5 F 病棟	50 床	7 対 1
4 F 病棟	44 床	7 対 1 小児入院医療管理料 4 (12 床)
3 F 病棟	42 床	常時 7 対 1 夜間 9 対 1 小児入院医療管理料 1
N I C U	21 床	常時 3 対 1 新生児特定集中治療室管理料
G C U	25 床	常時 6 対 1 小児入院医療管理料 1 から 新生児回復期入院医療管理料へ変更
I C U ・ C C U	HCU14 床を ICU4 床、HCU10 床へ変更	常時 4 対 1 ハイケアユニット入院医療管理料 常時 2 対 1 特定集中治療室管理料
手術室	5 部屋	

4 職員動向 (令和 5 年 3 月 31 日時点)

① 看護師・助産師数・平均年齢・平均在職年数・平均経験年数



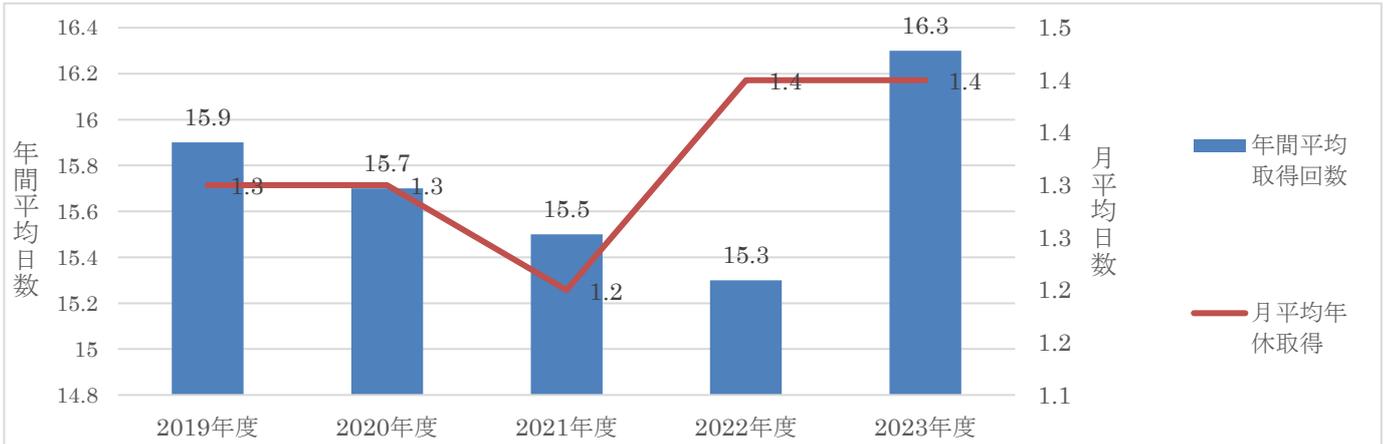
② 経験年数



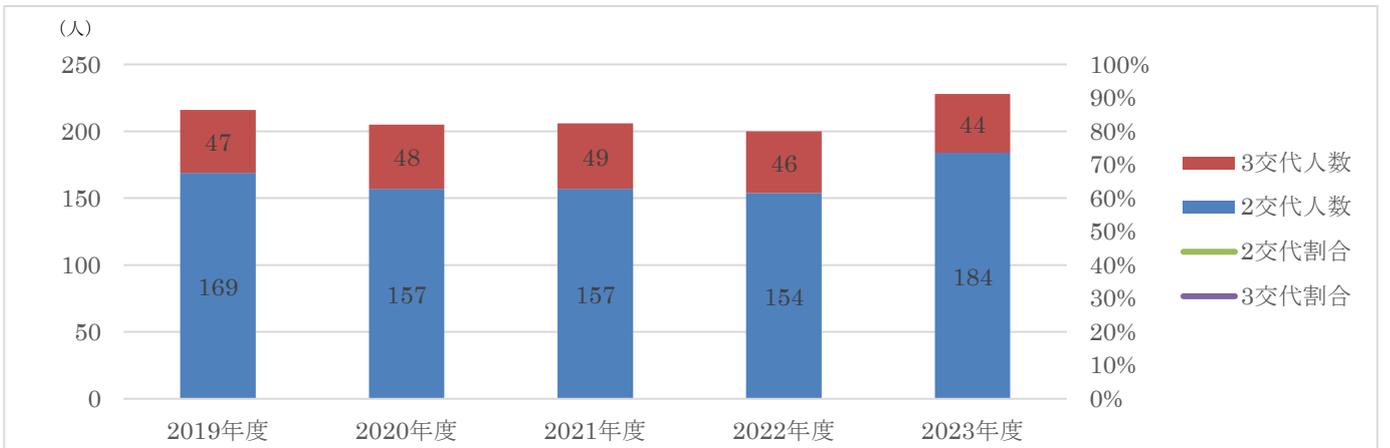
③ 産休・育休・特別休暇等の取得状況（令和6年度3月31日時点）

	産休	育休	部分休	育児短時間 夜勤無	育児短時間 夜勤有	介護	病休	休職	計
人数	23	32	17	11	10	3	34	5	135

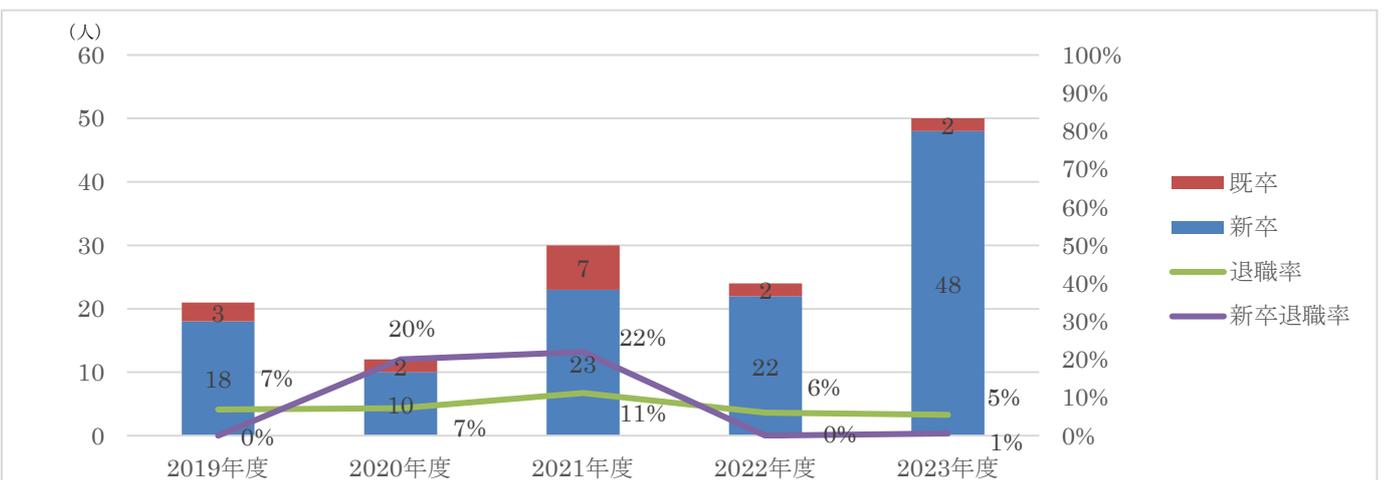
④ 年休取得状況



⑤ 夜勤選択割合（2交代と3交代）（令和5年3月31日時点）



⑥ 採用と退職者数（令和5年3月31日時点）



## 5 研修受講状況

### ① 院外研修受講状況

	全体	フルタイム勤務	部分休勤務	短時間勤務
研修対象者数（人）	211（産休・休職等除く）	160	19	32
院外研修・学会受講数（人）	238	193	1	14
院外研修受講率	113%	120%	5%	44%
eラーニング受講率	88%			

### ② 院内研修受講状況

ラダー	研修数	研修延べ日数	時間数	研修参加人数	参加延べ人数	延べ時間数
I	10	21	106.5	384	1008	5112
II	12	29	51	251	489	917.5
III	6	8	19.5	75	102	253.5
IV	4	11	35	40	96	330
V	1	3	3	6	6	18
選択	2	6	9	9	27	40.5
院内認定	6	27	27	35	166	166
合計	41	105	251	800	1894	6837.5

## 6 委員会活動

各委員会	活動内容
教育委員会	受講生が Off-JT の学びから自己の課題を見出し、OJT に活かして看護を実践できるよう支援することができた。具体的には、自己の課題に取り組むことができる研修内容を検討し、OJT に繋げる課題を提示することができた。また、実践報告書を活用し、研修により得られた知識から、自己が取り組むべき課題と看護実践がつながるよう支援することができた。今後は、ワークエンゲージメントを高め、スタッフ自らの内発的動機に基づいて、いきいきと働けるようになるために、ゆっくりと看護を主語に語り合い、学びあう場を作っていくことが課題である。
臨地実習指導委員会	実習の受け入れ拡大に伴い、臨地実習がスムーズに展開できるよう実習の体制を整備した。具体的には、実習の目的に合わせた指導が行えるよう、学校との事前打ち合わせを継続し、実習時の内容を委員会で情報交換、検討した。また、病院説明資料、実習のマニュアルを見直し、指導に活かせるよう整備した。
業務改善・用具検討委員会	業務改善では、薬剤部と協議のうえ、定期薬セットのタスクシフトを進めた。4階病棟で試行を経て導入、新生児病棟へと拡大した。さらに、フットポンプの運用方法と使用基準を臨床工学科とともに作成した。また、院内掲示物の調査を行い、医事課と運用方法の整備を行った。今後も、安全で質の高い看護の提供を目指して、タスクシェア・シフト等を含めた業務改善を行うとともに、適正な看護用具・医療機器の管理および整備を行っていく。

記録委員会	5月に変更した電子カルテの看護記録関連の記載について、問題抽出と対応策を検討した。また、今年度は記録記載基準に則った看護記録ができるように、看護記録の監査方法を変更し、自部署と他部署を監査する方法に変更した。新電子カルテでの看護記録記載に関しては、記載方法を統一し基準化することが次年度の課題となった。看護記録記載の監査方法の変更に関しては、他部署の監査を実施したことで、看護記録記載基準と手順の見直しにもつながり、監査は看護記録の質の担保の精度をあげるためにも必要と考える。
看護師助産師会	新入職会員に歓迎の記念品を贈呈した。会員にむけた講演会は、講師に高木チカ子氏を招き、「首こり・肩こり・腰の痛みの原因と対策」をテーマに医療職に起こりやすい症状と対策、予防法について実践も含めた講演をうけた。今後も、看護師・助産師同士の親睦・研究・教育を通し自己研鑽を図れるよう、会員の支援を行っていききたい。
アシスタント会	毎月スキルアップの勉強会を開催し、日々の業務を振り返ったり、困り事を共有したりしながら業務改善につなげた。
アシスタント業務検討会	看護補助者業務マニュアルの見直しを行った。また、タスクシフト/シェアを推進することができた。

## 7 看護実績

### ① 専門領域の強化

日本看護協会認定の専門看護師【母性】1名、認定看護師【新生児集中ケア、緩和ケア、糖尿病看護、皮膚・排泄ケア、クリティカルケア、集中ケア、感染管理、乳がん看護、がん化学療法看護、摂食・嚥下障害看護、認知症看護】15名は、質の高い看護を提供するとともに、院内・院外の講師として活躍している。

また、学会認定の認知症ケア専門士取得者は、「院内デイケア」の計画など増加する高齢者への活動を積極的に行っている。

・専門看護師・認定看護師 活動状況

分野	クリティカルケア領域：町田 裕子、宮崎 智雄、岡崎 麻衣
実践	新生児から超高齢者の重症患者の受け入れを継続している。令和5年度後期には、特定集中治療室管理料3を新規取得し、重症患者に必要な医療が即時に提供できるよう環境を整えている。また、重症患者の合併症・ADL低下予防や家族看護、医療機器から離脱困難な患者の入浴、院外散歩などQOLを高めるために多職種と協働しながら行った。管理的側面ではあるが、生体情報のモニタから電子カルテへの送信や重症経過表の整備、多職種カンファレンス等、重症患者の情報が多職種で共有されるよう取り組みを行っている。
指導	看護師のフィジカルアセスメント能力向上を目的に、ラダー別研修の講師を継続し実施した。研修内容は、ラダーに沿った実践をできる内容を考慮し、受講を通してステップアップできるように構成した。また、地域の医療職に対し、人工呼吸関連の勉強会を実施した。
相談	医療機器装着患者へのケアを中心に相談に応じている。

分野	母性看護：阿部 祥子
実践	高度実践として病棟・外来において社会的・精神的ハイリスクな対象者に対し、母親意識の形成・発達支援・母親役割支援を行った。また外来から1ヶ月健診までの切れ目ない継続支援として、入院時のFASTチェックのマニュアル作成、2週間健診、訪問指導連絡票の内容の見直し、地域への連携基準の作成から実施を行った。
倫理教育	病棟において周産期メンタルヘルスサポートについての勉強会やスタッフ自身の看護実践に対するリフレクションを支援した。院内においては倫理Ⅱのコース研修、院外においては千葉県看護協会でのリフレクションの講師、美浜保健センターでの母親学級を行った。
相談	病棟スタッフからの患者ケア（主に妊産婦・母乳・退院支援など）に対する相談に対応した。また他部署からの授乳や妊産婦に関する相談にも対応するための広報活動を行い母性看護の充実につなげたい。

分野	乳がん看護：中村 志穂
実践	すべてのがん患者に対し、意思決定支援や治療に伴う有害事象対策、心理面支援など専門的な介入を実践していくために、がん領域の認定看護師と協働し、週5日間の「がん看護外来」を開始した。2023年度は、295件の相談対応を実施することができた。それにより、患者・家族の思いを尊重した意思決定支援に繋げることができた。
指導	チャレンジレベルⅢ以上のスタッフを対象に、がん化学療法認定看護師と協働し、「がん看護（緩和）」コース研修を行った。
相談	病棟、外来看護師から相談を受け、患者の言動、症状からアセスメントを実施し、患者のニーズに即した看護について共に考えることができた。

分野	皮膚・排泄ケア：鈴木 修子
実践	「ストーマがあってもやりたいことができる」を目標に、主治医や病棟看護師、地域連携室と情報交換を行いながら患者支援を行っている。令和5年度のストーマ外来件数は180件であった。本外来では、がんの治療を行っている方が多く、初めましてから会えなくなるまで2年足らずのこともある。時間を無駄にせず、信頼と安心が提供できるような個別の看護を心がけている。院内褥瘡対策では実現可能なゴールを設定し、新病院に向けてよりよい医療提供の提案を行っている。令和5年度の褥瘡回診件数は373件であった。時代に合った褥瘡管理のための働きかけを継続する。
指導	院内研修を通して、ラダーに応じた看護観の形成を図っている。創傷管理など専門的な知識の普及を行い、現場のリーダーとして主体的に患者ケアを立案し実践できる看護師を育成することを目標としている。患者の安楽だけではなく、医療者の労働負担の軽減を図るため、内科病棟における夜間の排泄・褥瘡管理をマニュアル化し、3年に渡りブラッシュアップを図っている。
相談	令和5年度は院内新規コンサルテーション72件、病棟訪問は延べ113回であった。相談においては問題解決のための個別の具体策を提案している。近年では継続して、日本オストミー協会千葉県支部において若いオストメイトを対象に日常生活上の相談を受け、地域との交流を図っている。患者を通して訪問看護ステーションからの相談も随時受け付けている。

分野	がん化学療法看護：狩野 桂子、吉田 奈帆
実践	令和5年度は、2剤の新規導入薬剤があり、運用マニュアルや患者用リーフレット等の作成を行い、関連部署への教育も実施した。近年利用が拡大している免疫チェックポイント阻害剤のirAE対策アルゴリズムを関連部署へ配置、リスクを周知することで、安全な治療環境の整備を行った。 患者・家族への支援では、がん看護外来で、診療科毎に介入状況の差はみられるもの、295件の介入を行う事が出来た。
指導	所属部署における抗がん剤投与場面において、主に安全な投与管理、投与前後の観察、曝露対策についての指導を行った。外来化学療法室においては、有害事象（悪心嘔吐、皮膚障害、末梢神経障害等）に関する相談対応の実践を通し、症状アセスメントおよび対処方法について部署スタッフへ指導を行った。
相談	主に所属部署や外来化学療法室スタッフより、意思決定支援や有害事象への対応、療養環境調整の対応についての相談あり。必要に応じて患者面談を行うと共に、部署スタッフが主体的かつ継続的に介入を行なえるよう支援を行った。

分野	感染管理：窪田 眞弓、佐々木 みゆき、大内 咲絵
実践	病院内で発生する感染症の監視、対応、疫学的調査、また多剤耐性菌の保菌状況の把握と管理を行った。新型コロナウイルス感染症は5類感染症に移行し大きな流行はなくなったため、手指衛生やPPE着脱などの基本的な感染対策行動の遵守状況を再チェックした。手指衛生ラウンドを行い、5つのタイミングを知っているかどうかの確認、実際に手指消毒剤を使用してもらうなど、現状把握をした。今後も継続し、改善に努めていく。
指導	ICTラウンドを通して標準予防策の遵守状況や環境整備状況を確認し指導した。ASTでは抗菌薬が適正に使用されているか確認し、必要があれば適正使用となるよう指導した。院内研修は、e-ラーニング形式とし、未受講者へは受講するよう働きかけ受講率は99%だった。 次世代の感染管理を担う看護師を育成するために、アドバンス研修を行った。
相談	認定看護師3名で看護部門の各部署を分担して担当している。相互に連携をとりながら電話やメールでの相談に応じた。 また、部署の感染係から、手指衛生剤使用量増加に向け相談があり対応した。

分野	摂食嚥下障害看護：鈴木 恭子、樋口 智也
実践	摂食嚥下障害に関する最新の知識を活用し、言語聴覚士や管理栄養士などと連携し、患者・家族の支援を行っている。在宅療養を望む患者や家族に対しては食事形態や摂食方法の注意点や口腔ケアの指導を行った。退院後訪問で地域の訪問看護師と情報を共有することで継続看護に繋がられた。
指導	院内選択研修において、各部署の摂食嚥下障害看護の中心を担うスタッフの育成を目的にアドバンス研修を開催し3名が修了した。また、脳神経外科の診療拡大により摂食嚥下ケアのニーズが高まったため、院内全職種を対象に嚥下機能評価と摂食機能療法の研修会を開催した。院外活動においては、NST専門療法士実習受講生に向けての研修や保健センターでの出張研修も開催した。また、地域住民に対しての講座を計画しているため、次年度開催につなげる。
相談	入院患者の高齢化や脳神経外科の診療開始によって、医師や看護師から嚥下機能評価の依頼件数が増加した。また、NSTラウンドを通じて相談対応を行なった。今後も実践を通して相談件数の増加に繋げる。

分野	新生児集中ケア：平井 麻美
実践 指導	新生児の後遺症無き生存を目標に、新生児看護の質の維持・向上を目指し看護実践に努めている。令和5年度は新生児看護経験の浅いスタッフを中心に一緒にハイリスク新生児の看護実践を行い、スタッフ育成に取り組んだ。また、共育係と協働し、新生児科スタッフを対象としたNO療法、低体温療法の勉強会を開催した。SiPAP管理中の看護に必要な知識・技術の指標を作成し使用を開始した。指導する側・指導を受ける側の看護実践の水準を保つ基盤となった。今後は、人工呼吸器管理中の指標も作成し看護の質の担保に繋げていきたい。
相談	退院支援やケア検討など、自部署内における相談に対応した。

分野	糖尿病看護：水谷 幸子
実践 指導	退院後も、血糖測定やインスリン注射が必要な患者およびその家族に対し、血糖測定やインスリン自己注射手技の指導を行った。また、臍全摘の患者には、シックデイ時の対応パンフレットを作成し指導を行った。
相談	主に、所属病棟の看護職員からの薬物療法、低血糖時の対応についての相談に対応した。糖尿病患者は院内どの部署にも存在するため、自己の存在を認知してもらえよう広報し、相談が来るのを待つだけでなく、自身から他部署に出向き相談件数を増やしていきたい。

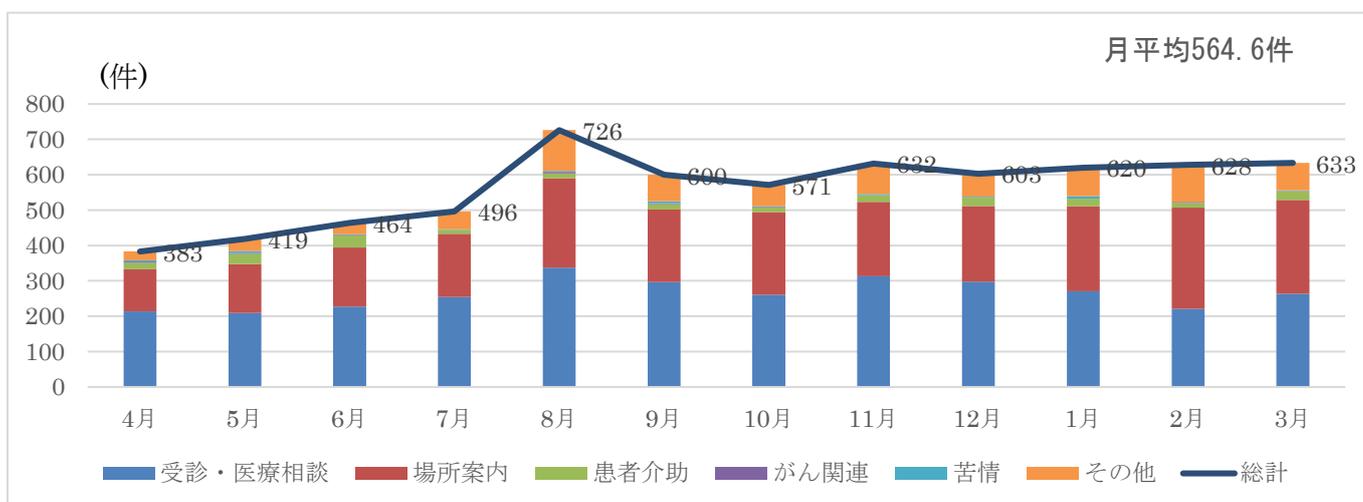
② 相談支援センター（総合相談件数推移・入院支援件数推移）

相総合相談件数は、前年度 5157 件から 6775 件（月平均 564.6 件）と増加傾向であった（ア）

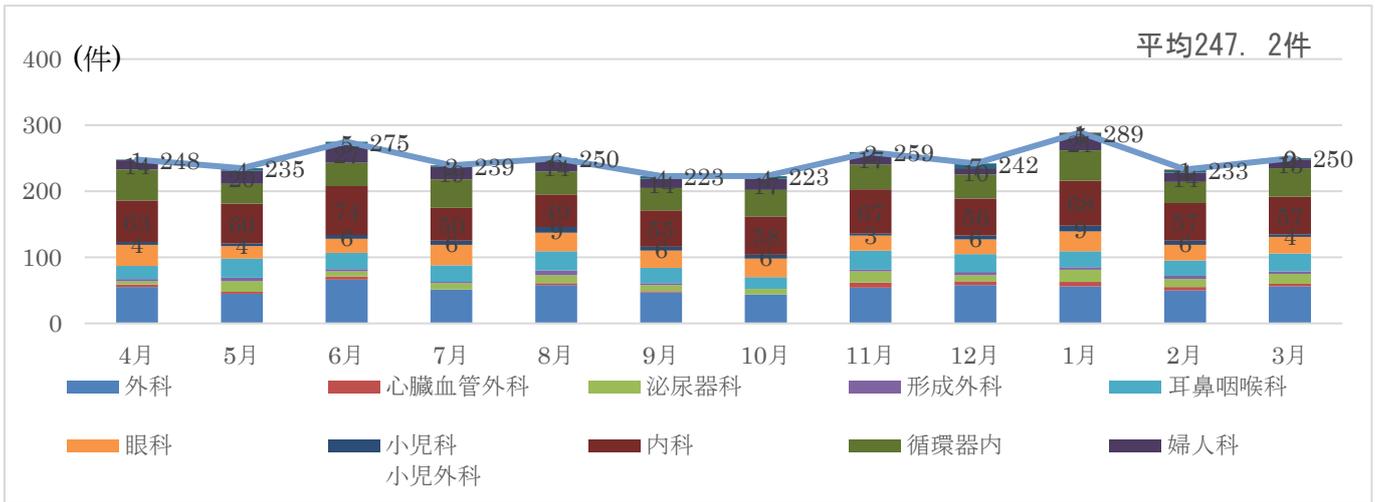
入院支援では、新たに脳神経外科・整形外科の入院支援も開始となっており、前年度 2551 件から 2996 件（平均 247.2 件/年）と増加傾向であった。（イ）

地域でも安心して暮らせるよう退院後訪問や同行訪問については、成人、新生児・小児を合わせて 8 件の実施であった（ウ）

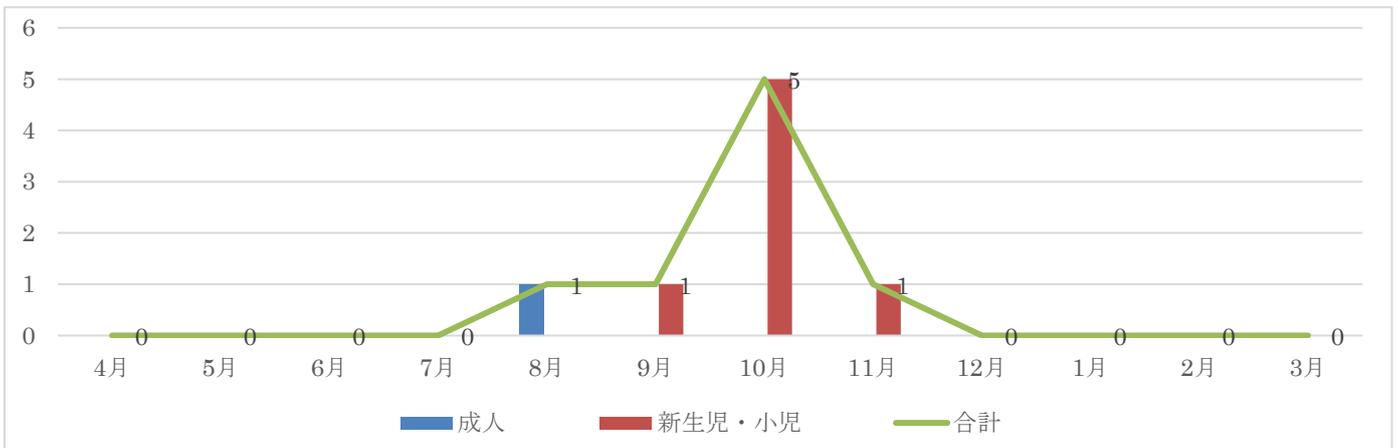
（ア）総合相談及び総合相談内訳



(イ)入院支援件数及び内訳



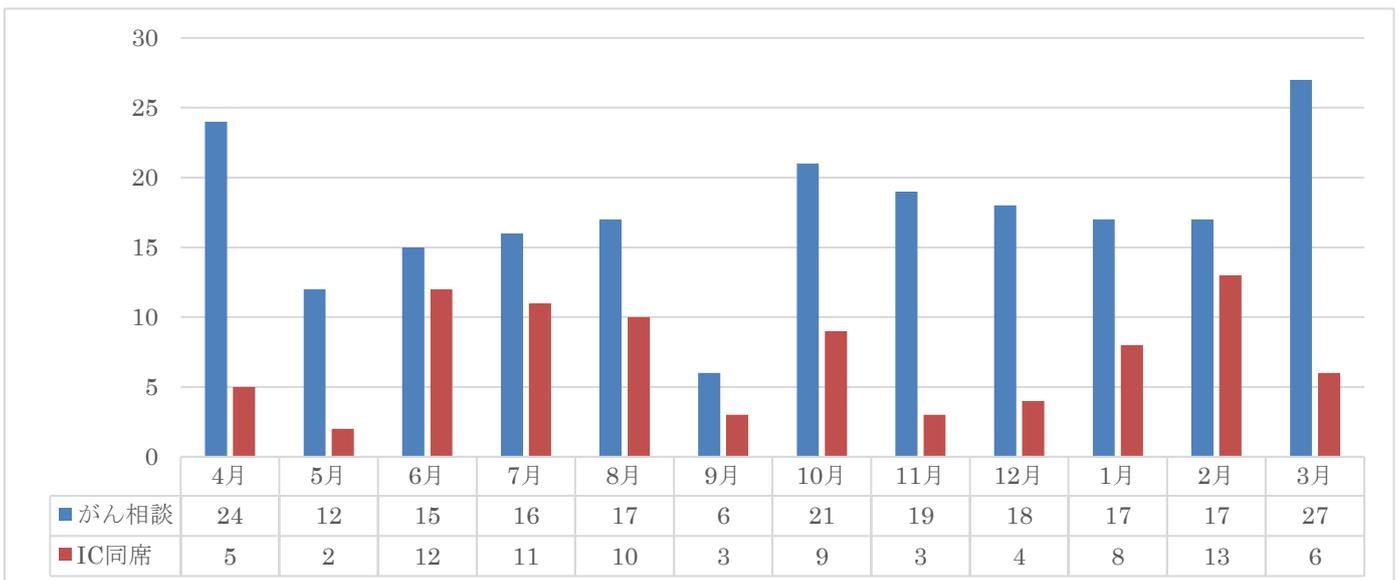
(ウ)退院後・同行訪問件数及び内訳



③ 看護外来：がん看護外来・助産師外来・母乳育児外来

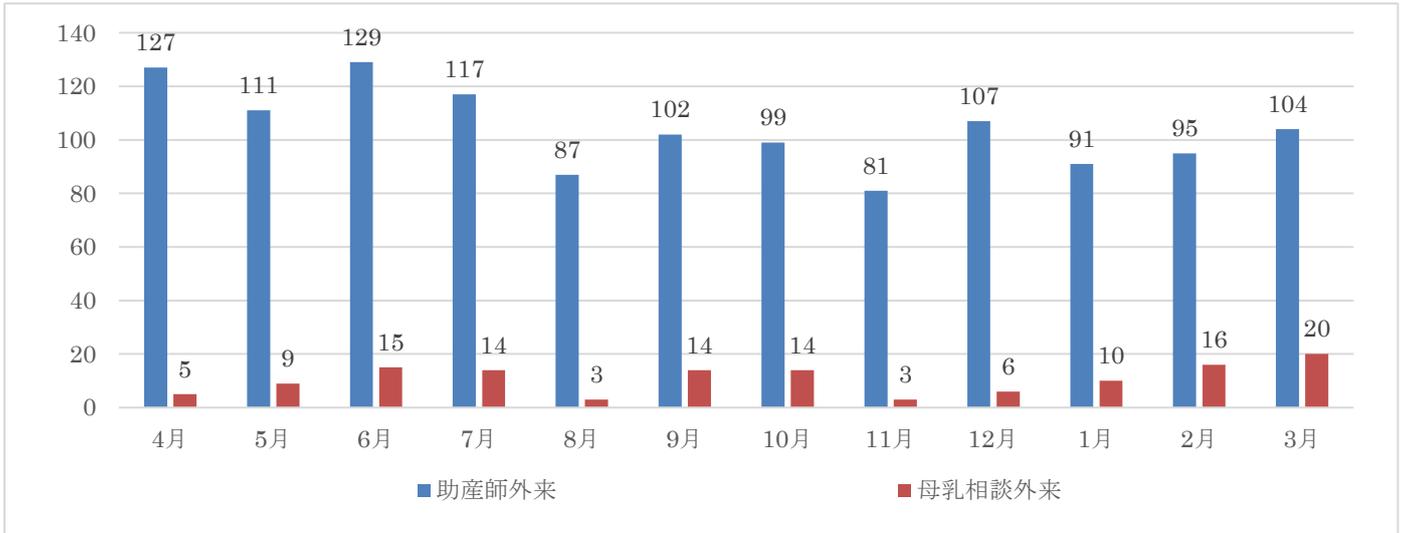
(ア)がん看護外来

総数：295件 内訳としてはがん相談 209件 IC同席 86件であり、前年度 198件より増加傾向であった



(イ)助産師外来総数

助産師外来：1379件、母乳相談外来：129件、10月から開始した産後2週間健診81件



- ・ 分娩件数は、昨年度から減少しており、助産師外来数も減少傾向である。
- ・ 今後の課題は、産後ケアの充実・母乳推進を図るための助産師外来の仕組みを再構築していきたい。

④ 教育講習会（新生児蘇生法講習会）開催

コース名	開催回数	参加人数
Aコース	3回	18名
Bコース	4回	14名
Sコース	10回	50名
合計	17回	82名

⑤ 院外活動

(ア) 学会発表

年月	所属	氏名	テーマ	主催
令和6年 3月7～9日	外来	ハイド未奈子 沓澤 佳子	脳神経外科親切による 血栓回収法導入への取組み	STROKE2024
令和6年 3月9日	手術室	白井 由美子	手術室待機勤務の運用の見直し	日本医療マネジメント学会 第22回千葉支部学術集会
令和6年 3月16日	ICU	岡田 知子	当院ICU・CCU病棟における 倫理カンファレンスについて ～導入から現在までの活動報告～	第51回 日本集中治療医学会 学術集会

(イ) 支援活動（派遣）

年月	組織	活動	
令和5年10月18日	看護部	長柄げんきキャンプ支援活動 (特別支援学級の宿泊学習)	千葉県
令和6年1月11日～1月18日	DMAT隊	準備、現地活動、現地・院内活動	石川県
令和6年1月21日～1月24日	災害支援ナース	災害救護活動	石川県

## ⑥ 人材確保

感染状況を確認しながら、現地での病院説明会見学会を実施し、看護協会主催のふれあい看護体験も実施しました。しかし、看護師を目指して学んでいる学生等が病院を知る機会は未だ制限されている状況です。そこで、引き続きオンラインでの病院説明会も計画的に開催しました。これからも、さまざまな機会を活用し、人材確保を推進していきます。

## ⑦ 臨地実習

令和5年度の臨地実習は、8教育機関の受け入れをすることができました。

今後の課題は、教育機関及および看護師・助産師の資格取得を目指す学生は、知識・技術の習得において、臨地での学びを必要としています。また、臨地実習での経験や学生が感じる病院の雰囲気は、学生にとって就職先を決定する上で重視する事項です。そのため引き続き、人材育成の貢献だけではなく、今後の人材確保対策として、教育機関とも連携しながら、柔軟に対応し臨地実習を実施していくことが課題です。